

難波西鶴

海ノ道

【17】

森田 雅也

でした。

西鶴は「好色一代男」巻七の五のみ、本来は仕事を持たないはずの世之介に、「米商人」という、西回り航路には欠かせないビジネスマンに仕立てました。世之介は酒田の湊に庄内米の買い付けにやってくる。そこに遠く離れた大坂新町のなじみの「和州太夫」から便りがありまし。それは3月の毎日を書いた「日帳(日記)」

朝ごみの客は中の嶋の塩屋の宇右衛門手代にて、昼は隙なき身とて高嶋屋にてあひ初、...と書かれていた日帳には、難波に集まる紳士たる一流ビジネスマンが、毎晩のように和州のもとに通っていることが書かれています。世之介は、日帳を読んでいるうちに、モテモテの和州のことが気になってたまらなくなり、最後まで読み切れ

一体どんな人たち？

ないどころか、半ばにも至らない14日まで読んで、慌てて大坂へ飛び帰って行きます。色男世之介を夢中にさせた和州という太夫も気になります。ここでは日帳に出てくる、難波にやってきたビジネスマンに注目したいと思います。

1日：塩屋の手代
2日：肥後の八代衆
3日・4日：唐津の大名
7日・8日：最上の衆
11日：播磨の網干衆

という客筋です。まず、「塩屋」ですが、大坂の地誌『難波鶴』(延宝7(1679)年刊)には、大坂中の島における諸藩の蔵屋敷の名代として「塩屋」の名があげられていました。この「塩屋」なら相当な豪商であったはず。また、『江戸時代の大阪海運』(昭和37年、大阪歴史編集室)には、「大阪所在の廻船問屋は市内の各河岸に軒を連ねていたが、このうち幾垣廻船および樽廻船については、寛永年代には泉屋、毛馬屋、大津屋、頭屋、塩屋、富田屋の名がみえている」とあります。この「塩屋」であれば有力廻船問屋です。さらに「享保十二丁未年 御触書之留並び浜方記録」には、「米会所掌嶋永来町塩屋庄次郎屋敷」(『大阪市中の島』第三)明治44年)とありますから、この場合の「塩屋」も大きな米問屋です。いずれの「塩屋」の場合でも、その手代なら一流の商人です。「肥後の八代衆」も球磨川水系の積出港として、川港の人吉、海路の八代港を有している、肥後米を商う米穀商です。「最上の衆」は、すでに述べた庄内米、紅花などを商う商人たちです。「播磨の網干衆」は播州米を商う米穀商です。「唐津の大名」は不明ですが、唐津は交通の要衝。大商人がいたことも事実です。それでは、西鶴はなぜこんな商人たちを知っていたのでしょうか。次選で述べます。(関西学院大学文学部 日本文学言語学教授)

難波にやってくるビジネスマン